

世界農業遺産の棚田を活用した“道の駅”集客の取り組み ～冬の休耕期間を利用する逆転の発想～

林 克 彦※1

1. はじめに

1-1 輪島市の概要

日本海に突き出た石川県能登半島の先端に位置する輪島市は、海岸線を中心に大部分が「能登半島国定公園」の区域に含まれ、北陸地域であることから冬は積雪や厳しい寒さに見舞われる。



図-1 位置図

昭和30年代には能登半島が舞台となった小説や映画が人気となり、さらに昭和50年頃には孤島・断崖絶壁の最果てという未知なる秘境のイメージに惹かれ多くの観光客が訪れるなど能登半島観光ブームとなった。古くから観光地として多くの人々を受け入れてきた本市において、現在も観光産業は重要な位置を占めている。

1-2 白米千枚田(しろよねせんまいだ)

本市の魅力は、能登半島に突き出た地形がもたらす“豊かな自然”と、「輪島塗」「輪島朝市」「キリコ祭り」「總持寺祖院」などに代表される”歴史的(伝統的)資源“の2点である。

輪島市白米町(しろよねまち)に位置する白米千枚田は“豊かな自然”と”歴史的資源”の魅力をも併せ持つ能登半島を代表する観光地であり、多くの命を育んできた里山里海の象徴である。



写真-1 白米千枚田 耕作風景

白米千枚田の特徴としては、

- 1,004枚の小さな田が連なる棚田。春は水面が連なり、夏や秋には稲穂によって美しさが増す。
- その美観から国名勝に指定。しかし耕作を続ける事のみによってその美観が保たれる。
- 奥能登の水田開発の歴史を今に伝えており、文化的価値が高い。
- 小さな田は耕作の機械化が困難。耕作効率が悪く地元農家の高齢化、後継者不足により耕作の継続が困難。
- 棚田を眺望できる場所は、道の駅「千枚田ポケットパーク」のみ。観光拠点として多くの観光客が訪れる。



写真-2 道の駅との位置関係

この棚田を守っていくため、本市では“ボランティアによる耕作作業”や“オーナー田制度”などの保全活動を行っている。

また直接的な保全活動以外に、景観の美しさや棚田ならではの魅力を発信し、観光客を呼び込むことで地域活性化や保全の仕組み強化へと繋げる取り組みを行っている。

2. 観光客の減少と能登半島地震

2-1 冷え込む観光産業

本市への入込客数は、能登半島観光ブームのピークである昭和55年に270(万人/年)、バブル経済全盛の平成3年に260(万人/年)を記録しているが、バブル経済崩壊後、年々減少し平成13年には110(万人/年)と大きく落ち込んでいる。

入込客数が落ち込む中、平成19年に本市を中心とした最大震度6強の”能登半島地震”が発生。能登半島全体で多くの建物やライフラインが被害を受けた。

※1 石川県 輪島市役所 土木課 道路改良係長

地震の被災地であることが風評被害につながり、平成19年には観光入込客数が近年最低の92(万人/年)となった。



写真-3 能登半島地震 被害

観光産業が重要な位置を占める本市において、観光客の減少・能登半島地震の風評被害は重くのしかかる問題であり、観光地としての誘客を促進させるイベントや交流人口を拡大させる施策の必要性が高まった。

2-2 ろうそくを使った復興イベント

地震の風評被害を払拭すべく、能登半島各地で数多くのイベントが行われた。その一環として能登半島各地でろうそくを使ったイベントを実施する「灯りでつなぐ能登半島」を開催。クライマックスイベントとして、輪島の代表的な観光地である白米千枚田の畦(あぜ)に「ろうそく」を並べる一夜限りのキャンドルイベントを行った。

夜に浮かび上がる棚田が幻想的で好評を博したこのイベント。「あぜの万燈(あかり)」と名付けられ地震後から年に一度の恒例行事として定着していくこととなった。



写真-4 あぜの万燈

3. 「あぜのきらめき」ろうそくからLEDへ

3-1 今までなかった観光イベント

白米千枚田の観光は春～秋の耕作時期がメインであり、冬の休耕期間中は雪が棚田を覆う日もあることから観光閑散期とされてきた。

また夜間では棚田自体を望むことができず、観光時間帯は日中に限られてきた。

「あぜの万燈」人気は新たな観光の目玉になりえる感触を得るものであったが、一夜限りのイベントは観光客数回復に直結するものではなかった。

新たなイベントを思案する中、この一夜限りという弱点を克服し、そこに観光面で除外されてきた“冬の休耕期間の活用”を足し合わせ思案したところ、「今までなかった冬の長期間イルミネーションイベントを実現できないか?」という発想に至った。

3-2 独立型太陽光発電LED「ペットボトル」の開発

長期イルミネーションを実現するため、当時注目されていたLEDを使った照明器具に着目し、地元で工場を持つ電子部品製造会社と共同開発を行う事とした。

開発を進めるにあたっては

①白米千枚田という場所柄から環境に配慮すること。

②冬期の厳しい気象条件でも支障なく使えること。

を基本とし、完成した照明器具はその素材や外見、コンセプトから「ペットボトル」と名付けた。

環境に配慮した結果、電源は自然エネルギーである太陽光を利用、日中に作った電気を充電機に蓄え夜は暗くなると自動的に点滅し4時間で消灯する仕様とした。

内蔵の太陽光パネルは冬の北陸の少ない日照時間でも効率的に充電できるものが使われており、また積雪にも耐えられるよう本体に足を付け、足部分を地面に刺して設置する白米千枚田での利用に特化した構造とした。

この開発したLEDを使った冬の長期イルミネーションイベントを「あぜのきらめき」と銘打ち、平成23年冬より実施することとした。

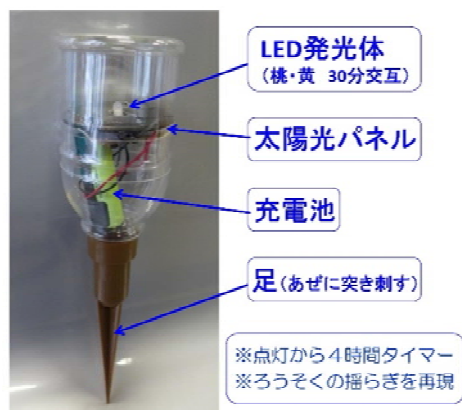


写真-5 ペットボトル

4. 「あぜのきらめき」効果

《 あぜのきらめき 概要 》

平成23年冬より実施しているLEDイルミネーションイベント。



- 白米千枚田において、稲刈り完了後から田植え前まで実施。
- 約21,000個の独立型太陽光発電LED「ペットポタル」は人力にて直接あぜに設置していく。
- LEDは光の強弱により、ろうそくの揺らぎを再現。30分ごとにピンクと黄色に色を変化。
- 「太陽光発電LEDの最大ディスプレイ」としてギネス世界記録認定の実績有り。
- 道の駅内 太陽光パネルも活用することにより、100%自然エネルギー(太陽光エネルギー)のイベント。

4-1 観光入込客数の増加

「ペットポタル」開発により、長期間イルミネーションが可能となり、白米千枚田は冬の休耕中でも棚田の美しさを表現できる“一年中観光客が訪れる棚田”に生まれ変わった。

図-2が示すとおり、道の駅「千枚田ポケットパーク」の年間入込客数は右肩上がりである。

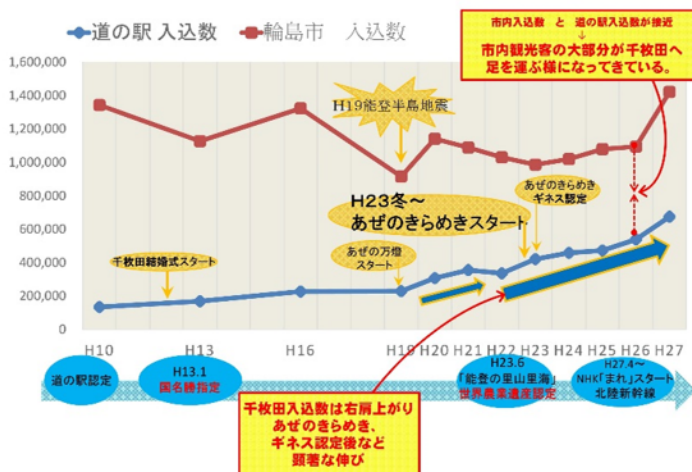


図-2 道の駅・市内入込客数の推移

「あぜのきらめき」の誘客効果としては、個人観光客はもとより旅行会社によるツアーも多数企画され、県外からも多くの方が訪れるほど人気である。



写真-6 夜間 道の駅展望台に
あふれかえる観光客(降雪あり)



写真-7 夜間 道の駅に停まる県外ツアーバス

図-3が示すとおり、平成23年より毎年実施することで、知名度も上がってきており「あぜのきらめき」自体の入込数も年々増加。夜間イベントであることから、相乗効果として冬の宿泊客数増加も確認できる。

単位：人

	あぜのきらめき効果検証		
	道の駅入込数 (あぜのきらめき入込数)	冬期間(12月～翌3月) 入り込み	
		市内入り込み	宿泊者数
平成22年 冬	あぜのきらめき 未開催	129,800	30,200
平成23年 冬	28,000	138,900	33,200
平成24年 冬	70,000	149,300	36,800
平成25年 冬	90,000	171,200	39,300
平成26年 冬	120,000	183,100	39,800
平成27年 冬	133,000	210,000	46,300

図-3 あぜのきらめき効果 検証

壮大で幻想的なイルミネーションは、今まで棚田や農業文化に関心の無かった若年層も集客しており、新たな年齢層が興味を示すことによって棚田の保全が活性化されることが期待される。

4-2 観光面での追い風

能登半島は長い農耕の歴史を持った地域であり、里山里海の豊かな自然や文化を一体で維持していく価値が高く評価され、平成23年に「能登の里山里海」が日本で初めて世界農業遺産の認定を受けた。

奥能登の農業文化を今に伝える白米千枚田は、この「能登の里山里海」の象徴的棚田として扱われている。



写真-8 世界農業遺産 能登の里山里海
ポータルサイト トップページ(石川県)

太陽光の自然エネルギーを利用したイルミネーションと世界農業遺産の棚田のマッチングは大きな話題となり、現在の「あぜのきらめき」は里山里海の保全の必要性、自然と人の共生の大切さを発信する意味合いも含むものとなった。

4-3 地域への定着

「あぜのきらめき」が冬期間実施され、春～秋だけではなく、道の駅へ一年を通して観光客が訪れるようになった。これにより道の駅内では継続した雇用が見込め、地域住民が持ち寄る地元特産品の販売も可能となった。



写真-9 にぎわう物販と生産者入りの棚田米

現在では地域住民が指定管理者として道の駅の運営に密接に関わりつつ、「南志見(なじみ) 活性化事業組合」として物販・飲食を展開している。

本道の駅は地域住民の雇用の場であり、地域の魅力を発信する重要な施設となっている。



写真-10 飲食ブースで働く地元婦人部

本年度の「あぜのきらめき」は平成28年10月15日から149日間の実施を予定している。

オープニングイベント当日は、「ほたるびと」と呼ばれるボランティアたちの手によって「ペットボトル」が田んぼのあぜに設置されていく。この行事は白米千枚田の耕作が終了し、輪島の冬を迎える恒例行事として、地元の人々に定着している。



写真-11 オープニング当日のほたるびとの列
ペットボトルの設置状況

白米千枚田は重要な観光資源であることはもちろん、能登の里山里海の象徴であり、地域に愛される宝でもある。今後とも多くの観光客を呼び込み、この美しい棚田の保全に努めていきたい。



写真-12 積雪にも負けず光る「あぜのきらめき」